荒井 崇史 講師

心理学部 心理学科／心理学研究科

Takashi Arai

[interview：汪 洋]

あらい・たかし。追手門学院大学心理学部心理学科・同大学院心理学研究科講師。2011年筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程修了（博士・心理学）。科学警察研究所犯罪行動科学部犯罪予防研究室期間業務職員、筑波大学人間系特任助教を経て、2012年より現職。武庫川女子大学短期大学部、聖泉大学でも非常勤講師を務める。

答えのあることを知るだけでなく、自分なりの“考え”を見いだす学びを。

〝地道な〟学問、犯罪心理学の世界へようこそ。

事件や犯罪。日々ニュースで取り上げられ、ドラマや映画でも多く題材として扱われる。それゆえ、犯罪心理学はある種〝身近な〟学問と思われがちだ。しかし「決してポップな学問ではない」と、荒井先生は言う。

「犯罪心理学は、犯罪者（加害者）だけが対象となるものではなく、被害者や、犯罪を見聞きすることによって影響を受ける一般市民もその対象。犯罪を規定する法律についての知識も必要となるので、地道さが求められるのは他の学問と同じです」。

人気の講義として最初は多くの学生が集まるものの、統計や法律の回を重ねるごとに「一定の人数に落ち着いてくる」そうだ。

犯罪を通して人間理解を深める。

もともと犯罪心理学の分野を選んだ理由は、「自分が、怒りやすい性格だと思っていたので、怒りの根源やそのコントロールについて興味があった」から。

大学院へ進み、科学警察研究所で研究員も務め、一貫して犯罪心理学の道を歩んできた荒井先生だが、自身としては犯罪心理学者としてよりも、社会心理学者としてアイデンティティを持ちながら研究・教育していきたいのだという。

〝犯罪〟そのものではなく、もっと幅広く、誰もが奥底に持っているであろう〝暴力性・攻撃性・怒り〟についての理解を深め、その知見を広めていきたいと願う。

「犯罪心理学は犯罪予防や捜査支援の観点から言えば特化された学問ではありますが、実はかなりの部分を社会心理学の研究知見をもって説明することができますから。ただ、犯罪は人間の本性が現れる現象でもあるので、人間理解を深めていくうえでも有用な研究分野だと考えています」。

自信を持って。まずは〝自分で考える〟こと。

追手門学院大学に赴任してきたのは、2012年4月。二年が経つ今、追大生の印象を訊ねると、「真面目で、少しおとなしいかな」と答える。

「もっと自信を持っていい。他校で教える機会もありますが、違いを感じることもありません。だから、学びにも遊びにももっとエネルギッシュに取り組んで、学生生活を有意義に過ごしてほしいなと思っています」。

自らを信じるためには、自ら考え、行動することは不可欠だ。

「知識を蓄えていくことも大切なのですが、高校生の時のような覚える〝勉強〟から、自分のアタマで考える〝学び〟へと変えていってほしい」。

そのためのきっかけやトレーニングとしても、犯罪心理学は有効な学問であるようだ。

「人生や世の中は、さまざまなジレンマに満ちていると思うけれど、何が正義・正解かを早急に結論づけてそれに従うことよりも、むしろそのことについて自分で考え続けることのほうがよほど大切なんです」。

犯罪心理学は、自らが問われる学問とも言えそうだ。